

「主イエス、死刑判決を受ける」

2016年01月12日

ルカによる福音書 23章 13節～25節。ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

ローマの総督ピラトはガリラヤの領主ヘロデから送り返されてきた主イエスを裁かざるを得なくなった。最高法院の議員たちと民衆を呼び寄せ「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」と言った。ところが、集まった人々は「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。バラバは「暴動と殺人のかどで投獄されていた」と記されているが、ローマ支配に抵抗して暴動を起こし、おそらくローマ兵を暗殺し、十字架刑を受けるはずの者ではなかったかと思われる。異なる写本には「祭りの度ごとに、ピラトは、囚人を一人彼らに釈放してやらなければならなかった」とあるように、この逾越祭に、囚人の一人を釈放する恩赦を、バラバに与えよと要求したのである。

ピラトは罪を見出すことのできない主イエスを釈放したいと、改めて呼びかけた。しかし人々は「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは三度目に「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」と呼びかけた。しかし人々は、主イエスを十字架につけるように大声で要求し、その声はますます大きくなった。ピラトは彼らの要求を受け入れ、主イエスに死刑判決を下した。そして、バラバを釈放し、主イエスを彼らに引き渡し、好きなようにさせた。最高法院の思惑通りに、主イエスはピラトから死刑判決を受け、彼の名のもとで執行される手はずが整った

主イエスに関わる裁判は「死刑ありき」から始まっている。ピラトはユダヤの最高権力者で強権を持って支配したが、最高法院と彼らに群がる人々の要求を飲まざるを得なかった。イザヤ書 53章 6節 bに「わたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた」と書かれているように、主イエスは最高法院の嫉妬と無法、民衆の権力者に媚びて有利な側につく日和見と、ピラトの無責任の三重の罪を負わされたのである。